好事例の発信について

居場所づくりホームページにおける好事例の発信

- 全国でこどもの居場所づくりの取組を推進するため、好事例の発信等が重要と考える。
- 居場所づくりホームページにおいて、事例紹介の場を設け、今後拡充していく方針。
- こどもの居場所づくり支援体制強化事業のうち、モデル事業を活用していただいた事例には、既に掲載用の原稿等を依頼し、準備を進めている。

2．こどもの居場所づくりに関する仲間の取組

以下にこどもの居場所づくりに取り組んでいただいている全国各地の事例をご紹介します。どんな居場所があったらいいかと考えたいこども・若者の皆さんや、これから居場所づくりに取り組みたいという方等、皆さんの地域にどんな居場所が欲しいか考える際、ぜひこれらの取組をご参考ください。

- こどもの居場所づくり支援体制強化事業を活用していただいた事例（準備中）
- こどもまんなかアクションにご登録いただいている事例
- こどもの居場所部会に関わっていただいている団体等の事例（準備中）

好事例の発信について

こどもまんなか
こども家庭庁

モデル事業の発信用資料（例）

宮崎市

民間施設（コワーキングスペース）を活用した中高生の居場所づくりモデル事業

【この事例の詳細はこちら】
https://www.city.miyazaki.miyazaki.jp/education/support/support/379115.html

事業目的

中高生が利用できる公的施設である児童館は、中高生から「小学生以下向けの施設となっており行きたいと思わない」と意見を聴いた。そのため、中高生が行きたいと思え、自分に合った過ごし方ができる施設（居場所）を提供し、また、多世代の人との交流を通して自己肯定感や社会性を育てるため、本事業を行った。

事業概要

中高生が行きたいと思える魅力的な施設として民間のコワーキングスペースを活用し、居場所として提供。また、定期的に中高生対象のイベントを開催し、利用・交流の促進を行った。

【開設日等】　土日・祝日（10時～18時）

【過ごし方】

・ひとりで学習や読書、ゲームなど・友人とおしゃべり・施設スタッフへの進路相談・気になる職業や趣味について社会人から話を聞く（スタッフから繋ぎ可能）

【イベント内容】

・ボードゲームイベント・デジタルアート体験・ＶＲ体験・進路相談会

活動の成果

アンケート回答から、利用する理由として「おしゃれな雰囲気」「集中して勉強できる」「他校との生徒と交流できる」などの過ごしたい場所としての回答が多くあり、また「前向きな気持ちになれる」「自分らしく過ごすことができる」などの自己肯定感が向上されている回答もあった。

【利用実績（R6.12月末時点）】　登録者数　546人
利用者数　1,391人（20.8人/日）

実施時のポイント

施設は通常社会人が利用しているため、中高生の席数を確保するためには社会人の利用が少ない日や時間帯を考慮して開設日を設定する必要がある。また、中高生の利用者数によってはお断りをすることもあるため、利用者へのリアルタイムでの周知方法等については事前に確認しておく必要がある。

担当者の声

コワーキング施設の利点は、スタッフや社会人、他校の生徒など様々な人と交流ができることであるが、交流するにはスタッフとの信頼関係を構築する期間が必要であると感じた。経過と共にスタッフとの会話が増えてきており、継続して実施し、さらに効果を検証していきたい。

好事例の発信について

こどもまんなか
こども家庭庁

モデル事業（被災）の発信用資料（例）

一般社団法人移動式あそび場全国ネットワーク

能登半島地震こども支援！移動式あそび場プロジェクト

【この事例の詳細はこちら】

事業目的

発災後に子どもが自由に遊び、話せる居場所がなくなってしまう事は、様々な災害で見られている。今回の能登半島地震発災後、能登でも同様の状況となっていたことから、私たちの持つ「移動式あそび場」を活用して、機動的に被災地を周り、あそび場を届けることにより、子どもたちの居場所を確保できるのではないかと考え、申請した。

事業概要

- 協力団体が作成したプレイカーを用いて、珠洲市内を巡回し、あそび場を実施した。
- 定例実施は１個所行っている。（正院小学校）
- あそび場では、プレイカーを中心に、コマやけん玉などの昔遊び、スラックラインやケンケンパリングなどを活用したアスレチック、手作りのプレイキットでのクーゲルバーンやホッケーといったあそびを展開している。
- これと同時に、ハンモックを活用した、フリースペースを設置し、「遊んでも遊ばなくてもいい」自由な居場所づくりを行っている。

活動の成果

珠洲市では、道路状況や倒壊家屋が片付いていないなどの理由から子どもたちが自由にあそびに行ける環境ではなくなってしまっている。そこで学校終わりにプレイカーによる遊び場を開催したことで、子どもたち自身が自由に遊べる環境をつくることができた。また継続的に支援に入ることでスタッフと子どもたちとの関係性をつくることができた。そのことで、子どもたちが心理的に安心して遊ぶことができ被災によるストレスを発散する場をつくることができた。

実施時のポイント

今回の活動実施にあたり、2月の段階で正院小学校の避難所責任者や校長先生との早期連携ができたことにより、3月の段階で週次での実施が可能となった。また、現地拠点を立ち上げ、常駐スタッフが現地調整を実施することにより、定例の会場ではないスポット開催も実施することができた。

担当者の声

支援を続けていく中で、私たちと子どもたちの関係性が構築されていき、あそび場が非日常から子どもたちの日常へと変わっていった。そのことにより、リラックスしながら様々なあそびをしている様子が見ることができ、安心できる場づくりができたと思っている。